透析医のひとりごと

「透析・腎移植との出会い」

平賀聖悟

軒並みではありますが，月日の経つのは早いもので，大学医学部を卒業してから53年も経ってしまいました．医師としての活動分野は広く基礎医学，臨床医学，社会医学と選択の道は数多くありましたが，そもそも医者になろうと思った動機は幼い頃，野口英世やアルベルト・シュバイツァーという立派な医師の存在を知り，医学研究者か無医村での医者になりたいと思い，病理学に興味を持ったり，国内の無医地区を調べたりしたこと等もありました．結局は大学卒業後，入局した泌尿器科を軸として透析や腎移植が自分のライフワークとなり，現在に至っているわけでありますが，細やかな自分の医師人生を振り返ってみたいと思います．

透析との出会い

大学紛争がピークとなった1968年（昭和43年）12月に東京医科歯科大学を卒業し，インターン制度が無くなり（旧）臨床研修医制度が始まりました．大部分の卒業生は入局を内定してからローテーションによる研修に入り，その後医局へ戻る，という新医師臨床研修制度へ向けた移行的な措置で，無論その間は無給でありました．落合京一郎教授に相談したところ，大学紛争の余波で混乱しているので，関連病院である都立大久保病院を薦められました．

その後の大学病院での短期間の研修中，腎不全患者さんには回転ドラム型の透析機が病棟においてあり，透析液の作成も手作りでしたが臨床応用の経験はできませんでした．急性腎不全については，先ず間欠的腹膜透析が第一選択で，実際に主治医として実施した経験もありますが，患者さんの病態が相当進行していた状態での適用で，数日間の延命しかできなかった記憶があります．

都立大久保病院には，教室の先輩である稲田俊雄先生が部長でおられ，一般泌尿器科患者のほか，透析にも力を入れておられて，当時日本でも数少ないというキール型の人工腎を導入されておりました．豪快な大先輩の稲田先生は，日本でも有数な装置で，都立病院で初めての設置，借金で入れてもらったと強調しておられました．

私が事実上透析に初めて触れたのは，このキール型人工腎であったと思います．研修医の役割は，職員や患者さんが来院する前に早朝からセロファンの膜張りとプライミング（輸血の用意）でした．対手の検査技師と一緒に薄い透析膜を張りますが，少しの歪みも無いように張る必要があり試行錯誤しました．EPO等はありませんから，毎透析には必ず輸血を用意し，後に透析患者のC型肝炎が大きな問題ともなりました．バスキュラーアクセスとしては外シャントが作られていましたが，1週間も経たずに閉塞し，その後1970

年頃から内シャントへ完全に移行したわけです．

この頃の思い出では，ある正月に10代の透析患者さんが姉と一緒に突然わが家へ挨拶に訪れたことで，予告も無く現れた患者さんに家人が皆びっくりしました．当時の透析効率の一端を示すいわゆる透析顔貌だったからです．この患者さんも1年後には脳出血で亡くなっています．当時の患者さんの予後は1～2年程度で大部分脳血管障害が死因と思われました．

私達が医者になった頃，日本の透析・腎移植は未だ夜明けといって良く，北岡建樹先生の監修による「人工透析研究会から日本透析医学会まで」[1]により当時の状況が分ります．丁度私達が卒業した1968年5月に第1回人工透析研究会が木本誠二会頭，佐藤博会長のもとで発足しております．主題として「透析液の組成について」，「血液透析について—Kolff型とKiil型との比較—」，「間歇的腹膜灌流について」と3題設けられ，当時のプログラムに透析や腎移植の分野で活躍された外科，内科，泌尿器科のパイオニアの先生方のお名前を多数見出すことができます．この頃は膜張りに追われていて研究会参加の余裕はありませんでしたが，稲田先生のグループは第1回から討論に加わっており，第2回研究会には東京医科歯科大学泌尿器科の横川正之教授が座長を努めておられたことも知りました．

都立大久保病院勤務の最後の頃，それより前の1966年にスチュアートによって開発された中空糸型透析器がわが国へも入ってきましたが，いきなり全面的な更新とはいかず様子見で使われだしたうちに，気がついて見れば中空糸型透析器時代になっていました．

東海大学時代

その後，東京医科歯科大学，東京労災病院，埼玉医科大学の泌尿器科で勤務したのち，1985年（昭和60年）8月から東海大学医学部移植学教室Ⅰ及び腎センターへ転勤することになりました．文部省（当時）への届出は第2泌尿器科とのことでしたが，かなり専門性の高い腎移植と透析療法に特化した教室で国内でもユニークな講座でした．

佐藤威教授を主任とし，飛田美穂先生と東海大学出身の優秀な若手教室員で運営されており，移植についても移植免疫を主題とする辻公美教授の移植学教室Ⅱという講座も設けられておりました．透析・移植とも私たちが大学を卒業した頃の，いわば夜明けの時代からすれば完全に臨床応用されている状態でしたが，夫々の分野に課題は山積されていて超多忙な時を過ごすことになりました．学会関係では人工透析研究会が1986年に日本透析療法学会へ改称され，1987年の第32回日本透析療法学会のワークショップの演者に指定されたものが，透析会誌への初原著[2]となりました．

1989年（平成元年）には，大学の短期教員派遣計画により米国の医学教育と臓器移植システムを調査する機会を得て，テキサス州ダラスに赴きました．同時期にテキサス大学医学部腎臓内科に留学されていた堀

図　テキサス大学医学部腎臓内科 Donald W. Seldin 教授と（1990 年 1 月）

江重郎先生（現順天堂大学泌尿器科教授）をお訪ねした時，丁度教室に来られたセルディン教授とお会いでき，記念の写真（図）をご一緒に撮らせて戴きました．学生時代から教わったセルディンの分類の，かのセルディン先生にお会いできたことは感激で一生の思い出となりました．この留学の成果は，帰国後大学へ報告すると共に，関係者の先生方によって公開講演会も開いて戴きました．

1992 年（平成 4 年）には，佐藤会長のもと第 37 回日本透析療法学会の事務局長を担当しましたが，このマンモス学会を開催するのに学内にいる教室員は計 9 名のみで，関連施設の事務長さんや当時まだ可能であった製薬メーカーの MR さん達にも全面的にご協力戴き何とか遂行できましたが，書き尽くせない裏話が沢山あります．ただ，この時の学会がパシフィコ横浜が建設されて初めての学会であったことや，ダラスでお世話になった移植内科医のヴァーニー・マリニ先生を講演にお招きできたことは忘れられない思い出です．

その翌年，第 23 回日本腎臓学会東部部会を佐藤会長が担当され，事務局長を再度担当しましたが，巨大な透析医学会を経験した後ではストレス無く運営できたと思います．印象に残ったことは，大島研三先生がご健在で学会においでになりましたが，懇親会の時，最後までお残りになり，若いホステス達と楽しそうに談笑されていたことです．1995 年（平成 7 年）には第 28 回日本腎移植臨床研究会を当番会長として箱根の小湧園で開催しましたが，雪の箱根という情景もさりながら，学会中に阪神・淡路大震災が勃発し，若干座長や参加者に混乱もありましたが，無事終了できたことが思い出となっています．

この間の 1994 年（平成 6 年）には，日本透析療法学会は日本透析医学会へ再度改称され現在に至っているわけであります．

サイコネフロロジー

東海大学の勤務時代には，透析や移植に関する沢山のサブスペシャリティー学会や研究会が立ちあげられ，ほとんどの会に参加し関わってきましたが，透析・移植医と精神科医がコラボするユニークなサイコネフロロジー研究会もこの頃発足しました．1990 年（平成 2 年）に太田和夫先生，春木繁一先生を中心に横浜で第 1 回サイコネフロロジーカンファレンスが開かれ，そのテーマに 2 年間も苦労の末，生体腎移植にやっとこぎつけた境界性パーソナリティ障害の患者さんがとりあげられたので興味を持ちました．その後，移植腎が脱落した透析再導入時[3)]や夫婦間腎移植等の非血縁移植時[4)]には複雑な人間関係の心理が働くことを知り，精神医学的な勉強も少しずつ進めてきました．また，精神医学教室にお願いして，リエゾン精神医学を専攻されている渡辺俊之先生にわれわれのチームのサイコネフロロジーに加わって戴きました．

1997 年（平成 9 年）には東海大学から社会保険三島病院（現 JCHO 三島総合病院）へ転勤しましたが，2006 年（平成 18 年）には第 17 回日本サイコネフロロジー研究会を主催し，本研究会も 30 年を経て 2019 年からは一般社団法人日本サイコネフロロジー学会へと改称されています．春木先生は自ら透析患者さんですが，腎移植についても深く関心を持たれて精神医学的な分析を行っております．日本の腎移植数は経年的に増加していますが，欧米の内容と全く異なるのは生体腎移植の割合が 90% と漸増している点で，生体腎移植の内訳として非血縁や ABO 血液型不適合，先行的腎移植（PEKT）の割合が多い[5)]のも特徴的であります．2018 年（平成 30 年）に開催された第 29 回日本サイコネフロロジー研究会において，春木先生のご逝去後に設けられた第 2 回春木繁一記念賞を戴いたことは大きな財産になっています．

健康の許す限り，地域病院においてライフワークとして選んだ泌尿器科，透析，移植の患者さんの臨床を続けていきたいと願っているこの頃です．

文　献

1）北岡建樹 監修：人工透析研究会から日本透析医学会まで 1968 年から 2000 年の記録，大阪・東京：メディカルレビュー社，2001.

2）平賀聖悟，飛田美穂，佐藤　威，他：血液透析患者に合併した大動脈瘤．透析会誌　1988；21(6)：557-564.

3）平賀聖悟：移植後再導入のタイミング（1）慢性拒絶反応の場合．臨牀透析　1989；5(4)：525-530.

4）Hiraga S, Tanaka K, Watanabe J, et al. : Living unrelated donor renal transplantation. Transplant. Proc. 1992; 24 : 1320-1322.

5）平賀聖悟：わが国の腎移植医療の変遷と今後の課題．腎臓　2019；41：27-30.

JCHO 三島総合病院名誉院長（静岡県）